

「超越」の根拠

——ハイデッガーのカント解釈に拠る——

加藤 篤子

ハイデッガーの「カントと形而上学の問題」は、「存在と時間」第一部で展開されるはずであった。「存在論の歴史の現象学的解体への準備的補足として、同時に歴史的序説の意味で主著の前篇において取扱われた問題性を解明すべきもの」として、著者自身により位置づけられている。

「存在と時間」においては「存在問題」が提起され、現存在の「存在了解」の開明として、実存論的分析論において展開される。そこでは「被投的企投」としての現存在の根源的存在構造が、日常性から出発して、「時間性」へと開明される。

「カントと形而上学の問題」は、カントの「純粹理性批判」の解釈に依り、形而上学の基礎づけを基礎的存在論の問題として提示する。それは人間の自然的本性に属する形而上学の基礎を準備する、有限な人間の認識の存在論的分析論として展開される。

カントは「いかにしてア・プリオリな総合判断は可能であるか」の問いを提起する。カントは認識を判断として捉える。総合判断においては主語の概念から出て行き主語に含まれない「別のあるもの」と結合することが要求される。経験的総合判断においては別のあるものは、経験的に提示され、その「客観的妥当性」が経験によって保証され

る。しかるにア・プリアリな綜合判断においては、存在者に関してその存在者から経験によって汲み取ることのできない別のものを提示しなければならない。このような判断の「客観的実在性」はいかにして保証されるか。これがカントが問うものである。ハイデッガーはここに存在論的認識の可能性への問いを見る。すなわち、存在者に関して経験に依存せずにア・プリアリにその存在規定を提示することは、存在者へと先行的に関係することにおいてのみ、換言すれば、先行的な存在了解としての存在論的認識に基づいてのみ可能となる。この認識が始めて、その内部で存在者がそれ自体として経験的綜合において経験されるところの地平を形成する。カントも「対象に関する認識というよりはむしろ、われわれが対象について認識する仕方がア・プリアリに可能であるべき限りにおいて、一般にこの仕方に関する認識を私は超越論的 *transzendental* と呼ぶ」(A11, B25)と規定する。それ故、課題は、存在者それ自体の研究ではなく、ア・プリアリな対象認識、すなわち存在論的認識の可能性への問いとなる。

以下において、「超越」を対象認識の内的生起としてとらえ、その可能性の根拠を問うハイデッガーのカント解釈を進行する。

一、直観と思惟

「形而上学の基礎づけに対する源流は人間の純粋理性であり、しかもこの基礎づけの問題性の核心にとつてまさき理性性ということ、換言すればその有限性ということこそ本質的なものである」(28)。ハイデッガーはこのように表明し、解釈の始めに「人間の認識の有限性」を強調する。カントによれば、「認識がどのような仕方において、またどのような媒介を通じて対象に関係するにせよ、認識が対象に直接に関するための通路、またすべての思惟が媒介として目ざすのは直観である」(A19, B33)。認識することは第一次的に直観することである。さらに「すべての思惟は直観に対して奉止的地位を有するにすぎない」(28)とハイデッガーは確言する。このような直観と思惟は、両者が「表

象」であることにおいて内的親近性が求められる。「表象」には「表象すること」と「表象されているものそのものが意識されていること」とが属する。しかし、認識の有限性とは、認識一般の規定ではなく、「人間」の認識に関して言われうることである。神の認識なら、直観することによって直観されうる存在者そのものを始めて創造する、ような表象作用であろう。そのような表象作用なら、存在者を始めから端的に洞見し直接に全体として直観しうるから思惟を必要としないであろう。思惟を必要とすることがすでに人間の直観の有限性の印章である。ここから有限な人間の認識の本質は人間の直観の有限性に存すると考える。

有限な認識は、創造的でない直観である。この直観が直接に表示する個別的なものは、予めすでに眼前していなければならぬ。それは直観されうるものに依存している。有限な直観は自ら対象を自らに与えることはできない。それは対象を与えられなければならない。直観の有限性はその「受容性」に存する。カントは「しかるに直観は、対象がわれわれに与えられるかぎりにおいてのみ生ずる。このことは更に、われわれ人間にとっては、対象が心性を何らかの仕方では触発することによってのみ可能である」(A19, B33)と言う。このような直観は触発されうるものとして感性である。

有限な直観は常にその時々々に直観される個別的なものに拘束されている。有限な直観が認識であるためには、直観されるものが自分および他人に理解しうるものとして、しかしかものものとして規定されねばならない。この規定作用は「一般的」表象作用として「多を一のものに」規制し、それに基づいて「多に対して妥当する」仕方では、直観において表象されるものを一層表象的のものとする。また規定的表象作用はそれ自身において判断的規定作用である。判断する能力は悟性である。悟性の表象作用は——直観の直接性を欠いて——迂路を必要とする。すなわち、数多の個別的なものがそれを通じて、また、それから概念的に表象されるものとなるための一般的なものへの顧慮を必要とする。この迂路性、がその有限性の最も著しい指標である。

悟性は確かに、有限な直観と同様に、創造的ではない。悟性は存在者を決して製作しないが、しかし直観の受容と違って一種の産出である(39)。直観されるものが概念的に表象される場合の一般的なものを、悟性が端的に産出すると言わなければならない。一般的なものはその事象内容に関して、直観的なものから汲みとらねばならない。しかし悟性は、「事象内容が包括的に統一」として多に対して妥当する仕方——概念の形式——を指示することによって対象の提示を助ける。このような特有の悟性の表象作用には「自発性」の性格がみられる。

有限な認識において認識されうるものは、直観の受容性に対応して「それ自身から自らを示さ」なければならぬ。顕現するもの、すなわち「現象」である。

以上のように、有限な認識の可能性の源泉は、感性と悟性としての認識の要素で尽きるのではないか。カント自身、「これら二つの認識源泉(感性と悟性)のほかには他の何もも有しなく」(A294, B350)と言う。しかしこの源泉は単なる並存ではない。有限な認識の要求するものは、むしろ両源泉の合一(総合)である。したがって、この両者はいずれも表象であるが、しかしいまだ認識ではないのであり、「それらが合一することからのみ認識が発源しうる」(A51, B75)。カントは「人間の認識には二つの幹がある。これらの幹はおそらく一つの共通の、しかしわれわれには未知の根から生ずるものである。二つの幹というのは感性と悟性であり……」(A14, B29)とも述べる。ハイデッガーは、カントが未知のものとして単に示唆したにとどめたそのものへと注意を促し、敢えてそのものへと入り込むことを要求する。

さて、問われているのは経験から自由な存在論的認識の総合の可能性である。存在者についての有限な認識のうちに「純粹直観」が見い出されうるか。求められているのは、個別的なものを直接的にしかも経験から自由に遭遇させることである。純粹直観として「空間」および「時間」が取り出される。空間は外感の形式として、外感の出来事が秩序づけられる諸関係の全体を予め与える。これは、「いづれに対しても妥当する」限りで、ある種の統一をもつ。

しかしそれは概念の統一ではなく、それ自身において唯一であるものの統一である。さらに、われわれは、空間的形態や空間関係を示さない内感の所与を見出す。これは心性の状態の継起として告知される。ここにおいて経験に先立って予めしかも非対象的、非主題的に見られているのは「純粋な先後関係」である。これは内感の形式としての時間である。さらに「時間はすべての現象一般のア・プリオリな形式的制約である」(A34, B50)。時間は普遍的な純粋直観として空間に優位をもつ。これは次のように基礎づけられる。カントは、一方においては外的現象に時間規定を拒否して時間を内感の所与に制約する。しかしすべての表象は表象作用として直接に時間に属するから、表象作用において表象されるもの、そのものも時間に属する。表象作用の直接的内時間性を經由して、表象されるもの、すなわち外感を通じて規定される表象も間接的に時間に属することになる。

時間の普遍性、すなわちその中心的な存在論的機能がそのような根拠づけに尽きるものであろうか。時間そのものの存在論的機能は主観性の本質が根源的に規定されたときのみ、純粋な存在論的認識の本質要素として正当づけられるべきである。

有限な認識のもう一つの要素は「思惟」である。カントは人間の認識の有限性を悟性の有限性として見る。「私たちの悟性は思考することができるだけであって、感官において直観を求めなければならない」(B155)。「それ故この悟性は、それ自身だけでは全然何ひとつ認識することなく、認識のための素材を、すなわちその悟性に客観をつうじて与えられなければならない直観を、結合し秩序づけるだけである」(B146)。思惟的直観の有限性は「概念」による認識にある。存在論的認識を可能とする純粋認識の要素として「純粋概念」が求められる。

概念的表象においては「そのつど数多の対象がそこで一致するような一つのものの表象」(B5)が前提とされねばならない。この「一つのものの統一」が概念的表象において先取的に、すべての規定的言表に先立って、予め保持されていなければならない。これが概念形成の根本作用である。概念の内容を考えると経験的概念の実質内容は、経験

的に比較、抽象する直観作用を通じて生じるが、「純粹概念」のもとで求められる実質内容は「本質的に現象から導来されないような反省された表象」(G)でなければならぬ。それ故純粹概念としてはア・プリアリな根本作用に加えてその内容もア・プリアリに獲得されねばならない。しかし悟性は、内容を与える直観に依存した単なる空虚な結合の機能をもつにすぎないとすれば、いかにして悟性は概念にその実質内容を与えうるか。悟性自体が概念の内容でもあるべきとすれば、その根源は「概念形成の根本作用そのもの」のうちのみ存するであろう。「悟性は判断の能力」(A69, B64)である。判断は反省的、合一の作用として「統一への先行的顧慮」(G)によって導かれてくるときのみ可能である。反省すること自身が「合一を導く統一性そのものの先行的表象」(G)である。悟性の本質は根源的な概念把握である。その作用の構造のうちには「その都度の指導的な統一の表象」(G)が準備されている。この「表象された統一」が純粹概念の内容である。それ故、悟性そのものうちに純粹概念が存し、それは反省する概念として、すべての判断の可能性の根拠である。純粹概念は古来「範疇」と呼ばれる存在論的述語の性格を有する。カントにおいては判断表が範疇および範疇表の根源とされている。このことの正当性に関する種々の疑念はここでは取り上げないことにして、ただ「範疇は、単に事実に判断表から導来されないというだけではなく、一般に判断表からは導来されない」(G)ことが指摘されるにとどまる。

カントは「超越論的感性論」および「超越論的論理学」において感性と悟性を孤立化させて論究の出発点としている。しかしこの孤立化においてまさに、悟性の有限性の決定的契機、すなわち直観への内的関係が断ち切られているとハイデッガーは解する。純粹認識の本質は、この内的依存関係としての根源的統一にあり、諸要素はそこから始めて発源し、またそこにおいて統一の合一のうちに保たれる。

ここから問題は、「純粹認識の本質統一の基礎づけ」に移行する。

二、「超越」の可能性

(1) 存在論的綜合

解釈は「概念の分析論」から出発する。「純粹悟性概念または範疇について」(第一章第三節、第二版は十項)の導入部で、超越論的感性論と超越論的論理学の關係として提示された命題は、「純粹直観」が「純粹悟性」にア・プリオリに素材として多様を提供するものとして解される。このことは、觸発を通じて行われる。「この觸発が常に純粹認識に属するかぎり、このことはわれわれの純粹思惟が常に思惟を觸発する時間の前に置かれていることを意味する」(B2)として、思惟の時間への本質的依存性が指摘される。さらに、思惟は、この多様が思惟そのもの——概念的に規定するものとしての——に適合するように要求する。そのために直観の多様が分散状態から引き離されなければならない。すなわち通観され集成されねばならない。「この働きを綜合と名づける」(A76, B102)。カントは綜合を思惟の自発性に基づけるが、ハイデッガーはこれをむしろ思惟の直観への依存性に基づく有限性として捉える。「この綜合は直観の事柄でも思惟の事柄でもない。それは謂わば兩者の間を媒介しつつ、兩者と親和性を有する」(B3)表作用である。カント自身は「やがて見られるように綜合一般は構想力の単なる作用である。これは心の不可欠ではあるが盲目的な機能であって、これを欠くときわれわれは一般に全く認識をもたないであろうが、しかしわれわれがこれを認識することは極めて稀である。」(A78, B103)と述べている。カントは続けて「しかしながらこの綜合を概念へともたらずのは、悟性に帰属する機能であって、このことによつて悟性は私たちにはじめて本来の意味での認識を提供する」(A78, B103)とする。この部分のハイデッガーの解釈は、特有のものであり、解釈全体の鍵となるであろう。「一般に綜合構造において認識の本質構造のうちに示されるすべて、ものは明らかに構造力を通じて惹き起こされることが示唆される」(B3)。「しかし同時にこの綜合は主導的な統一への願慮を必要とする。従つて純粹綜合は、表象的合一としてこの綜合に帰属する統一を予めそれ自体として、換言すれば、一般的に表象しなければなら

い」(63)。このことによって「純粹綜合はそれが表象するところの統一を概念に持ち來たし、これによって自らに統一を与える」(63)。このように認識の本質構造を「純粹綜合」が貫ぬき、主導的統一そのものも純粹綜合に固有のものでされる。さらには、カントが悟性の機能とする「概念へもたらすこと」も、純粹綜合そのものが自己に帰属する統一を「概念へもたらす」と解される。「悟性の機能」がここにおいて「純粹綜合の表象作用」に取って代わられている。このことをどのように理解すべきか。悟性の機能を排除するものと考えるべきであろうか。ハイデッガーは純粹綜合を表象作用として、認識全体を貫ぬく統一の作用として考え、悟性の機能のその内的表象作用を内側からとらえるのであろう。さらに続くカントの文章に即して、純粹認識の完全な本質の統一のために必要な「純粹直観の多様」、「構想力による多様の綜合」、「綜合に統一を与える悟性概念」が指摘される。この三元性のうちで構想力の綜合は中間を占める。この中間をハイデッガーは「構造的中間」と解する。この構造は綜合的機能の自同性として、「直観および思惟として同時に働く多肢的な合一作用並びに統一作用の根源的に豊かな全体」(64)であり、本質的・構造的な共属性である。それ故カントの「一つの判断におけるさまざまな諸表象に統一を与えるこの同じ機能が、一つの直観におけるさまざまな諸表象のたんなる綜合にも統一を与えるが、この機能は、一般的に表現すれば、純粹悟性概念と呼ばれる」(A79~B104)ことが、「純粹綜合は純粹直観において純粹に共観的に働き、また同時に純粹思惟において純粹に反省的に働く」(68)と解されるのであろう。それではこの自同的、全体的統一の存在論的根拠はいかなるものであろうか。

(2) 超越の地平——綜合的統一

ハイデッガーは、「範疇の超越論的演繹」の本来の意図を「存在論的認識の本質統一の根源的な自己提示」(68)とみなし、そこにおいて「超越」の可能性が開明されると解する。この箇所解釈は意図的に第一版に依拠する。

「有限な認識者が自らそれではなく、またそれを創ったのでもない存在者に関係しうるのは、このすでに眼前にあ

る存在者がそれ自身から遭遇しうる場合だけである」(66)。そのためには存在者は「予めすでに一般に存在者として、換言すれば、その存在構成に関して認識されていなければならない」(68)~(69)。ここに含意されているのは、存在論的認識が——前存在論的なものとして——「超越」の可能性の条件であるということである。人間は有限存在者として「根源的に……に向かう」ことにおいて、自己に何ものかが対応しうるような場面を予め保持する。「このような場面のうちに自らを保持し、この場面を形成すること」が存在者への有限的関係としての「超越」[Transzendenz] (70)にはかならない。このような超越の本質構造の可能性において、思惟はいかなる働きをするか。

存在者は遭遇しうるものとして「対立するものとして自らを示しうる」(71)。したがって存在者に予め、しかも常に対立の可能性が与えられていなければならない。この対立の可能性は「われわれ自身から対立させる」(72)こととして、開明されねばならない。すなわち「対象一般へ存在論的に向かうことの本質」(73)が課題となる。これとの内的関連から「表象の対象」[A104]の意味が明らかたされねばならない。「この対象はわれわれの認識が漫然とあるいは任意に規定されているということに抵抗し、そうではなくて、ア・プリオリな或る種の仕方規定されている、そのようなものと見なされる」[A104]。対立させることにおいて「抵抗性」が告知される。これは存在者の抵抗性ではなく、存在の先行的抵抗性である。「対象の対象性的思想は一種の強要(必然性)を伴う。すべての遭遇するものはこの強要によって予め総括的に一致するよう強いられる」(74)。対立させる側が統一を自ら予め保持すると言われる。これは先行的に統一を表象する「二つの意識」としての悟性の根源作用である。ここにおいて統一はすべての可能的総括を予め規制する拘束として自らに表象される。このような一般的制約の表象は「規則」である。この規制的統一(の表象)を唯一の内容としてもち、さらに表象作用として予めしかも始めて規則的なものを与える概念が、根源的に悟性に基づく「純粹概念」である。ここで悟性は規則の能力である。規則の能力として悟性はまさに対立させることを可能とさせ、その中で直観がその時々々に提示する個別的なものを規制する。それでは悟性は最高の能力ではない

か。しかるにハイデッガーに従えば、悟性のこの作用においてこそ、悟性は至高の有限者として、直観への依存性が最も鋭く照らし出されるはずである。「純粹直観と純粹思惟との本質的、構造的統一が両者を完全な有限性のうちへ沈める。そしてこの有限性は超越として告知される」(27)。この本質的構造的統一の開明を意図して、「純粹悟性概念の演繹」の「第三節」(A115~A128)に依拠する解釈が続けられる。

「存在者が有限存在者に近づき得るためには、予め有限存在者が自ら、存在者に向かいつつ存在者を対立させることがなければならぬ。この対立させる作用は、遭遇しうる存在者を可能的共属の統一地平へと予め取り入れる。このア・プリオリな合一する統一は、遭遇する存在者に対して先取的でなければならぬ。しかしこの遭遇する存在者自身は、純粹直観によって予め保持されている時間の地平によって前もって拘束されている。純粹悟性のこの先取しつつ合一する統一は、それ故、予めまた純粹直観と合一されていなければならない」(28)。こうして「純粹直観と純粹悟性のア・プリオリな合一的全体が対立させること、の場面を形成し、その中に入ってすべての存在者が遭遇しうるものとなる」(29)。

このようにハイデッガーは超越の地平の形成と同時に存在者の対立可能性の成立の仕方を全体的統一において示そうとしている。この合一的全体の構造と仕方が演繹論の二つの方途で示され、それを通じて構想力が仲介者として際立ってくる。第一の途は純粹悟性(純粹統覚)から始まる。

抵抗性と相關する「統一を予め保持する」ことが、超越形成の要件となる。統一が予め保持する仕方で表象される。この自己意識は統覚であり、恒常的、自同的なものとして、超越論的(超越を形成するものとして)に「超越論的統覚」(A100)と呼ばれる。この表象作用において予め表象される統一が、拘束的な、規制するものとして顕わになる。しかもこの表象されるものが合一する統一としてそれである。このような全体構造においてはじめて、遭遇する存在者はわれわれに関わることができる。純粹悟性はここで、予め統一を表象する作用として超越論的統覚とし

働き、それ自身「私は思惟する」である。「統一のこの純粹意識はただ時々、また事実に働くのではなく常に可能でなければならぬ。」「統一を対立させる作用は、一つの能力としての統覚に基づく」(77)。ここで超越論的統覚として働く純粹悟性、同時に純粹概念が、能力としての純粹統覚に基づく、と言われる。

このように「表象された統一がいまや始めて遭遇する存在者を期待する」(77)。この統一の説明のためにカントの次の命題が引用される。「それ(綜合的統一)は綜合を前提とし、または綜合を包含する」(A118)。カントにおいてはこの命題は純粹統覚から出発する文脈の中で「……この原理はア・プリオリに確立されており、私たちの諸表象の(したがってまた直観における)すべての多様なものの統一の超越論的原理と呼ばれうる。ところで主観における多様なものの統一は綜合的である。それゆえ純粹統覚はすべての可能的直観における多様なものの綜合的統一の原理をあたえてくれるものである。」(A117)に続くものである。さらに「注」(A117)において「すべての認識の論理的形式の可能性は、必然的に、一つの能力としてのこの統覚に基づく」と言われる。

ハイデッガーは、ここにおいてカントが合一的綜合に対する統一の構造関係の一義的規定に関して著しく動揺していると指摘する。いずれにせよ、超越論的統覚として働く純粹悟性の統一は、能力としての純粹統覚に基づくが、同時にそれは綜合的統一として、綜合を前提とする。この「前提」をハイデッガーは、前述した通り、統一が本質必然的に綜合に属すると解する。しかし勿論存在論的所屬関係ではない。統一を表象することが合一する統一として行われ、綜合の全体構造のために統一を予め保持しなければならない、ということである。

超越論的統覚はア・プリオリなものとして必然的にその関連する綜合は純粹綜合である。すべての綜合が構想力によって惹き起こされるとするところから、「超越論的統覚は本質的に純粹構想力に関係づけられる」(78)と帰結される。純粹構想力は形成的、産出的なものとして、カントはその機能を「超越論的」と名づける(A123)。

さて、次の命題の解釈がここでの核心となるであろう。

“Also ist das Prinzipium der notwendigen Einheit der reinen (produktiven) Synthesis der Einbildungskraft vor der Apperzeption der Grund der Möglichkeit aller Erkenntnis, besonders der Erfahrung” (A118)

ハイデッガーは“vor”を「先立って」と解せず「眼前に」と解すべきだと言う。したがって「統覚の眼前にある構想力の純粹な(産出的)綜合の必然的統一の原理は、すべての認識、特に經驗の可能性の根拠である。」とされる。これにより超越論的統覚と純粹構想力との構造統一の性格が明らかになる。ハイデッガーは「従って統一の表象作用は本質的に自らの前に、合一する統一を看取する。換言すればこの表象作用はそれ自身合一する(表象)作用である」(9)と結論する。しかるに、ここに、表象作用(超越論的統覚)と表象されるもの(構想力の綜合的統一)との存在、そのものとしての自明性を意図した解釈が読みとれるのではないだろうか。しかしまた、カントに即して考えるなら、純粹綜合の統一の原理が「構想力の純粹綜合の必然的統一をすべての可能的現象に関して含んでいるところのA・プリアリな純粹認識」すなわち「カテゴリー、言いかえれば純粹悟性概念」(A119)であろう。さらにこのの根底には統覚の根源的統一、すなわち、能力としての純粹統覚がひそんでいなければならないであろう。

しかしここで「能力」とはいかなることか。存在論的な意味の発源させるものであろうか。そうだとするとハイデッガーの純粹構想力との関連はどのように考えるべきか。超越論的統覚と直ちに同一と考えてよいのか。ここではハイデッガーは、超越論的統覚(悟性)と純粹構想力との内的連関性を示すのみである。

同時に、純粹綜合はA・プリアリに合一する表象作用として、それが合一するものをA・プリアリに与えられていなければならない。予め純粹に受容し、つとつ与える、普遍的直観は「時間」である。それ故純粹構想力は本質的に時間と関係しなければならず、そのようにしてのみ、純粹構想力は、超越論的統覚(悟性)と時間(直観)との間の仲介者であるべきことが示される。しかしここではまだ構想力と時間との関係は十分に明らかにされない。

演繹の第二の途は、經驗的なものから出発する。感官は受容するが遭遇者の結合性というようなものをそれ自身知

覚のうちにもつことはできない。有限存在者は存在者を決して同時的全体としては知覚できず、遭遇するものは個々に継起的に見い出される。したがってそれが経験において結合したものとして遭遇しうべきためには結合が予め理解されていなければならない。これは「関係というようなもの一般をまず始めに表象し形成すること」として構想力に帰着させられる。(80)

経験的知覚において全系列(連想)を描き出すことは経験的構想力の主観的統一に基づいて可能であろう。しかしそれが客観的根拠をもつに至らない場合には、諸現象の人間の認識への適合も偶然的なものとなる。私がすべての知覚を一つの意識(根源的統覚)に数え入れることによってのみ、私はすべての知覚にさいして、私はそれらの諸知覚を意識していると言うことができる」(A123)。それ故経験的構想力の再生的綜合に先立って、ア・プリオリに洞察されうる根拠がなければならない。この根拠に基づいてのみ、現象の客観性が成立し、認識となりうる。これは経験的には連想に関して親和性と名づけられる。これは関係を産出的に形成する純粹構想力からの帰結と考えられる。構想力は経験的再生的綜合の能力であるのみならず、一つのア・プリオリな生産的綜合の能力として、超越論的機能として働くものと考えられる。「構想力のこの超越論的機能を介してのみ、諸現象の親和性すら……したがって経験自身も可能となる」(A123)。

このような形成的な構想力は悟性とのように関係するか。構想力の超越論的機能は、「現象の綜合における必然的統一」を意図する(A123)。このことをハイデッカーは「すべての結合、まして合一、一般の純粹な形成は、統一を予め表象する、ということを構造的に含む」(80)とする。ア・プリオリな構想力に対してこの統一の表象もア・プリオリなものとして、すなわち統覚であり、統一の表象作用そのものは、常にすべての形成に不変の同一のものとして所屬する。これはカントの「不変不動の自我(純粹統覚)であり、表象がいやしくも可能であるかぎり、あらゆる私たちの表象の相関者をなす」(A123)ものに外ならない。構想力の結合は、それ自体としては感性的である。親和性の

先行的形成もそのものとしては經驗的直観に属する。それが対象の客観性を支えうべき必然的統一を形成するために「純粹統覚が付け加わらなければならない」(A12a)。しかるに第一の途が示したように、「超越論的統覚はそれ自身統一を表象する作用として合一において形成される統一を自らの前にもたなければならぬ」(B)。ここに明確に純粹統覚は構想力によって形成されるものとして限定されている。しかもそれ自身が超越論的統覚(悟性)の根拠とされる。

「それ故私たちは、すべての認識の根底にア・プリオリにある人間の魂の根本能力として、純粹構想力をもっている。この構想力を介して私たちは、一方では直観の多様なものを結合し、ついで他方ではこの多様なものを純粹統覚の必然的統一という条件と結合する」(A12a)。このように純粹構想力を純粹認識の根源的仲介者として解することに、ア・プリオリに超越を形成すべき存在論的根拠の内的可能性が証示されてくる。

(3) 純粹概念の感性化——超越論的図式性

前節においては、純粹認識の統一構造において、中間項としての構想力に対する悟性の関係が主として示された。しかるに、すべての認識が第一次的に直観であるところから、純粹構想力の純粹直観への関係、同時に、純粹悟性の純粹直観への関係が論究されねばならない。ハイデッガーは「純粹悟性概念の図式性」の章に依って説明を進める。

解釈は専ら超越の最も内的生起に定位して行われる。超越の地平形成において、存在者が受容的に遭遇されうるために、「有限な悟性の対立させる作用は、対象性そのものを直観的に呈示しなければならない」(B)。そのためは「呈示されたものの形観、Andlickを自分自身から形成する」(B)ことがなければならぬ。これを行うのは純粹構想力である。「或る概念にその形象を供与する構想力の一般的な遣り方についての表象を、私は図式と名づける」(A140, B179)。図式は規則を表象することであるが、それは、規制する統一そのものを主題的に把えることとしてではなく、統一から眼を背むけて、規制の仕方をそのものとして表象することである。このような表象には特有な

形象性格(図式—形象)が属する。これが「本来の概念的表象作用」(98)であり、第一次的に形成的な構想力に基づいて行われる。このような図式が、「個別的相貌の形象と概念を媒介する表象として」概念の感性化を可能とする。

「実際、われわれの純粹感性化的概念の基礎にあるのは対象の形象(直接的形観)ではなく、むしろ図式である」(A140, B180)。

超越として純粹に対立させる作用において、対立するものが抵抗性として認知可能となるためには、純粹悟性概念の本質的な感性化がなければならぬ。純粹悟性概念の感性化としての、超越における図式性はいかなるものか。この感性化の基づくべき純粹図式はいかなるものか。カントは「純粹悟性概念の図式は全くいかなる形象にも持ち来たされえないものである」(A142)と述べ、その形象性格を排除する。しかしこのことは、純粹悟性概念の感性化を否定するものではなく、純粹悟性概念の図式は、經驗的、存在的概念の図式—形象へは持ち来たされえないという意味である。超越を形成する存在論的認識においては、純粹悟性概念は超越論的構想力の綜合の媒介によって本質的に純粹直観(時間)に関連する。「時間は純粹直観としてすべての經驗に先立って一つの形観を供与する。このような純粹直観において与えられる純粹形観(カントでは今—系列の純粹継起)は従って純粹形象と名づけられねばならぬ」(98)。カント自身も「感官一般のすべての対象の純粹形象は、時間である」(A142, B182)と言う。したがって時間には純粹形象として図式—形象であり、純粹悟性概念に対立する直観の形式にすぎないようなものではない。それ故に純粹悟性概念の図式性は感性化のために悟性概念を必然的に時間のうちに規制し入れなければならぬ。時間は「唯一の対象」(A31, B47)である。それ故に時間は純粹悟性概念の唯一の形観可能性である。この唯一の形観可能性がそれ自身で自らのうちに示すものは、常にただ時間および時間的なもののみである。しかるに純粹悟性概念の完結的、多様性が唯一の形観可能性において形象をもつべきなら「唯一の時間」が多様な仕方では形象となり得なければならぬ。「純粹悟性概念の図式は、唯一の純粹な形観可能性を多様な純粹形象へ分節する」(99)。このような仕方では純粹

概念の図式は時間を規定する。それ故「図式とは規則に従うア・プリアリな時間規定」(A145, B18d)であり、「超越論的時間規定」(A138, B177)である。

この図式性はア・プリアリに超越を形成しそれ故に「超越論的図式性」(96)と呼ばれる。超越において対象性(抵抗性)を対立させることが可能となるのは、「図式性をもつ直観としての存在論的認識が規則統一の超越論的親和性を時間の形象においてア・プリアリに看取しうるものとし」(96)、その図式—形象によって超越論的図式、すなわち、純粹悟性概念が必然的に対応性格をうることによる。したがって個々の純粹図式を超越論的時間規定として詳細に解釈することにより、この対応性格が証示されるべきであろう。カントは、範疇表に基づいて個々の純粹悟性概念の図式の定義を与えている。そして範疇の四つの区分契機に従って、時間の形象となりうべき四つの可能性を「時間系列、時間内容、時間秩序、時間総括」として示すべきものとする。ハイデッガーはこれらの時間性格を「時間それ自身」の分析によって時間から体系的に展開されているのではない(96)と指摘する。

しかしこのことは、カントの「図式論」そのものを退けることではない。それどころかこの章を「純粹理性批判」全体の核心的部分として評価する。それは何故であろうか。

カントは図式性の問題を「包摂」の問題として提起し、超越論的包摂——純粹悟性概念のもとへの感性的直観の包摂——の可能性の問いへと導く。この「範疇の現象への適用」において本来的に問われているのは、根源的概念の概念性の問題である。感性的直観と異種とする概念(範疇)のもとに感性的直観(現象)を包摂することの可能性は、カントにおいて、この異種性に橋渡しをする仲介者へと向かわせることになる。ここに超越論的図式性の理念が予め特徴づけられる。これは純粹で、しかも同時に知性的で感性的な表象でなければならない。このような媒介が「構想力の所産」(A142, B18d)である超越論的時間規定において可能となるとされる。ハイデッガーはこのようなカントの問題展開において、存在論的認識の内的可能性の本質としての超越論的図式性の意味が示されると評価する。

「それ故に超越論的図式性は存在論的認識の内的可能性の根拠である。それは純粹思惟において表示されるものが必然的に時間の形態において直觀的に自らを示すという仕方では純粹に對立させることにおいて對立させるものを形成する」(102)。

時間は、ア・プリオリに与えるものとして予め超越の地平に認知しうべき呈示性を賦与する。時間は唯一の純粹な普遍的形像として超越の地平に先行的な合一的包圍性を与える。時間は、純粹に自らを与えるものものとして端的に一般に制止というものを呈示する。すなわち超越における対象性の抵抗を有限存在者にとって認知可能なものとする。

これらの時間の定義は、さらに根源的な存在論的な性格づけを要求する。

(4) 最高綜合原則

以上によって超越を形成する存在論的綜合の内的可能性がその統一的全体構造において開明されたとすれば、カントの提示する「すべての綜合判断の最高原則」の解釈によってハイデッガーは何を証示しようとするのか。

すべての綜合判断を基礎づける真理的綜合においては、思惟は有限存在者自らが支配しえない全く別のものへ自ら脱出しなければならぬ。この脱出を可能にし形成する「媒体」を、カントは次のように限定する。「それはすべてのわれわれの表象を含んでいるような一つの総括者にはかならない。すなわち内感および内感のア・プリオリな形式、つまり時間である。表象の綜合は構想力に基づくが、しかし表象の綜合的統一（これは判断に必要である）は統覚の統一に基づく」(A155, B194)。ここに明確に時間、構想力、統覚の三元性が示される。しかるにそこに形成されるのは、有限な認識の本質をなす「超越」にはかならない。しかもその形成の中心となるのは、ハイデッガーの解釈に依れば、超越論的構想力である。このような超越の本質統一の可能性の根拠が、カントの「経験の可能性」の定式の解釈を通して示される。

ここでの可能性とは、経験を予め可能とすると、ころのもの、の意に解されねばならない。そこから「経験の可能性」は固有の二義性において制約される。経験とは「存在者についての有限な、直観的、受容的な認識」(109)として捉えられる。ここでは直観の表象として対象が与えられ、その表象を経験に係り、させることが必要である。このためには、呈示されたものに「予め向かうこと」が必要である。これが第一の制約である。

さらに、認識の眞理性は「客観との一致」(A150, B189)を前提とする。そのためには可能的な一致の対象、すなわち「規準を与えて規制する或るものが予め遭遇されねばならない」(110)。すなわち、対象性の地平が地平として認知されていなければならない。これが第二の制約である。この二つの制約が共同して経験、すなわち超越の可能性の根拠をなす。

それ故カントがすべてのア・プリオリな綜合判断の最高原則として提示する「経験一般の可能性の諸条件は、同時に経験の諸対象の可能性の条件である」(A158, B197)という命題を、ハイデッガーは、カントが決定的とみなした内容を越えて、その条件の「同時性」において評価しようとする。すなわち、この命題は、超越構造の本質統一を表明し、二つの制約が超越の可能性の根拠として、綜合的に同時的に生起することを述べたものと解せられる。それ故、これは超越の最も内的な統一的構造の根源的な現象学的認識の表現であるとする。

三、超越論的構想力と時間——その序論——

(1) 超越論的構想力

前述の解釈を通して、超越の根拠としての純粹認識（存在論的認識）において、純粹直観（時間）と純粹思维（統覚）の本質統一を形成する仲介者として超越論的構想力が取り出される。いったい、超越論的構想力とは、いかなるものとして理解すべきであろうか。詳細な論究はここでは行えないが、ただ、「純粹理性批判」の解釈を通して超越

形成の根源要素として考えられるそれは、經驗的、存在的な心的能力として解してはならないということである。構想力は特有の二義性において形成的、と言われる。受容的と自発的の二重の形成として、特有の仕方で感性と悟性の中間を占める。しかし超越論的構想力として考えられるのは、經驗的な意味で、存在者を創造産出するものとしての、形成的ではない。「構想力はもともと対象性そのものの地平の形觀を存在者の經驗に先立って形成する」(221)。したがって構想力は、存在論的超越の本質構造を可能にする——先の經驗の可能性と同義として——ものとして、存在論的機能と解することもできよう。しかしこれは經驗的能力ではない。「それは固有の能力として、構想力に対して本質的な構造関係をもつ二つの能力の統一を形成する」(226)。その意味でカントの言う、感性と悟性との共通の根と見なすことができる。

純粹直觀は本質上直觀しうるものとして自らその形象を形成的に与える。純粹直觀(時間)は經驗的に直觀しうるものの地平となるべき純粹形觀を予め形成する。同時に、そこで直觀されるもの——非主題的——非対象的把握において——はそれ自身構想的、と言われる。それ故純粹直觀(時間)が根源的に純粹構想力である、とハイデッガーは規定する。同時に純粹構想力は純粹な有限直觀として、感性的とされる。

思惟と直觀は区別されながらも、「両者は却って表象の種として、表象作用一般という同一の類に属する」(228) (36)。超越における悟性の対立させる作用は、すべての可能な表象的合一に指導を与える統一を予め保持し、規則全体の同一性として表象する。私は思惟するがすべての表象作用に伴う。超越においては、純粹悟性は統一の地平を自ら予め形成する作用であり、超越論的図式性において図式を操作する自発性である。しかるに純粹図式は「構想力の所産」であり、外見上悟性に固有な自発的、形成的、表象作用は、超越論的構想力の根本作用に帰せられる。さらに、純粹思惟の自発性にもかかわらず一種の純粹な受容性が明らかにみられる。ここに受容されるものは超越論的統覚の統一として、抵抗性にはかならない。規則の能力としての悟性の表象する規則は拘束性において表象される。この意

味で純粹思维は本来的に受容的なものとして、有限な直観の性格を有する。直観と思维の構造的に統一的な受容的、自発性、存在論的には、その可能性において超越論的構想力から発源するものと見なされる。

さらには、純粹直観としての時間と、超越論的構想力との固有な関係の仕方が開明されねばならない。このことは、ハイデッガーにおいて構想力が綜合一般の能力として、純粹綜合の三つの様態を貫ぬくことに基ついて、綜合一般に見られる時間性格を取り出すこととして行われる。

詳細な証明の経過はここでは省略して、概要のみを示す。純粹直観は根源的な受容作用として今そのものの直接的形観、すなわち今の現在性一般の直接的形観であるが、純粹直観に必然的な純粹覚知的綜合が、今および現在性そのものに關係し、それ自身においてこの關係が向うところのものを形成する。すなわち覚知としての純粹綜合は現在性一般を呈示するものとして時間形成的な時間性格を有する。

再生的綜合は、心性がこの綜合において再生すべきものを保持し、うることを含む。このことは心性が時間、を區別し、それ以前が視野のうちに入ることによって可能である。これは純粹再生としての綜合が、以前という地平を視野として予め開いていること、すなわち既往性の形成、によって可能となる。純粹再生は現在性を形成する直観の純粹綜合と本質的に合一している。このことは超越論的構想力に基づく。

さらに再生的綜合と覚知的綜合との二つの綜合の基礎には、そこにおいて先に、間に、後に経験される存在者の同一性に関して、その存在者を合一する表象が指導的なものとして存する。この同一化的表象が再認作用である。純粹再認としての純粹綜合が、同一化の可能性を呈示する。これは再認における予め保持しうること一般の地平の探索を意味する。その意味で将来性の根源的形成である。ここに、時間は第一次的に将来から時熟する、という根源の本質が現われてくる。

純粹綜合が純粹形成能力としての超越論的構想力に基づくかぎり、超越論的構想力は、三つの様態を貫ぬく綜合

(この統覚に悟性の可能性すらもつづいてるのであるが)のもとへともたらずところの、悟性のそうした根源的能力とである」(B157)。「それゆえ悟性が、構想力の超越論的綜合という名称のもとで、悟性がその能力にほかならない受動的主観へとおよぼす働きは、私たちが正當にも、内的感官がそれによって触発されると言いうるような、そのような働きである。統覚および綜合的統一は内的感官と同一のものでは全然なく……。これに反して内的感官は直観のたんなる形式を含むが……いかなる規定された直観をもまだ全然含んでいないのであって、この規定された直観は、私が図示的綜合と名づけておいた構想力の超越論的な働きによって、内的感官が規定されることの意識(悟性が内的感官へとおよぼす綜合的影響)をつうじてのみ可能である」(B158)。このように構想力の超越論的働きによって悟性が直観の形式を規定することは、「悟性が内的感官を触発することによって」(B159)可能となる、と限定されている。ここで規定された直観として時間の今一系列の継起も表象されうることになる。カントはここで、構想力の超越論的綜合をも悟性の触発作用に属するものとして、触発される直観から区別する。ここに暗に示される超越論的図式の構造ははたがってハイデッガーが超越形成の可能性として示そうとしたものとは確かに異ってくる。カントは思考する自我と、直観する自我とを主観の中で区別する。しかしながら、カント自身、自我を区別しながらも、同一主観としてそれらが同じものであること、それ故「思考する主観としての自我は、私が思考されたものであること以上におのれに対して直観において与えられて」(B160)いるのはどうしてなのか、という、主観の存在の問題を示している。さらに「内的感官をつうじておのれ自身を直観するのは、私たちが内的におのれ自身によって触発されるとおりにのみ直観すること」(B161)を認めざるをえないという。しかも「私が存在するとおりの私についていかなる認識をももつものではなく、私が私自身に現象するとおりの私についての認識をもつにすぎない」(B162)。この現象としての自己は「時間を根底にもつ」(B163)自己直観によって受容的に与えられる常に感性的にとどまる「現存在」(B164)である、としてカントは人間の認識の有限性を、悟性において認めるのみでなく、本質的には現存在

そのものに関する自己直観（主観）の受容性において見ると言えよう。それ故、ハイデッガーが、現存在の存在を問おうとする場合も、有限な認識として、現象学的なものとなるのであろう。

このようにカントにおいても時間、人間存在の有限性の根底にあるものと考えられよう。しかし、第二版では構想力は悟性に属するものとなる。超越論的構想力に存在論的認識の根拠を求めるハイデッガーの真意の解明は、時間性をさらに、追求することを要求する。

（“KANT und das Problem der Metaphysik”からの引用ページは数字のみ。“Kritik der reinen Vernunft”からの引用は、第一版はA、第二版はBとした。）